

男同士の絆 ～イギリス文学とホモソーシャルな欲望～

イヴ・コゾフスキー・セジウィック

Eve Kosofsky Sedgwick

Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire

(New York: Columbia University Press, 1985)

1) Introduction**1-1) 著者紹介**

<イヴ・コゾフスキー・セジウィック>

コーネル大学を卒業後、イェール大学で博士号を取得する。アトマス大学助教授、デューク大学教授を経て、現在はニューヨーク市立大学英文学教授の職にある。また、彼女は元々、ゴシック小説の研究者であった。本書は、フェミニズム・精神分析・社会史・人類学などの多領域を横断しながらジェンダー間の力学を鮮やかに提示したセジウィックの出世作である。

1-2) 用語説明 ～ホモソーシャルリティとは？～

ホモソーシャルリティとは、男性たちの絆による単性支配の社会構造を指す。男性が社会の旨味を独占するには、男性同士の絆からエロティックな絆（ホモセクシュアリティ）を注意深く取り去り、同時に女性を交換ゲームの「対象」に貶めることが必要とされる。このため、ホモソーシャルリティは、ホモフォビア（同性愛嫌悪）とミソジニー（女性蔑視）の両方を孕んで成立する（石田 2002）。

1-3) 前作までとのつながりと本書の意図

結婚制度には、インセスト・タブーがまるで普遍的制度であるかのように現れる。これに対し、フロイトはインセスト・タブーの要因には、人間の心理的成長過程で生じる「エディプス・コンプレックス」が関係すると考えた。一方、レヴィ＝ストロースは、インセスト・タブーの社会的要因に注目し、男同士の協力関係を築くための「女の交換」という論理を生み出した。

さらに、レヴィ＝ストロースを解釈し直すことで、Sex/Gender System を生み出し、ジェンダーの問題にセクシュアリティの視点を取り入れることに成功したルービンによって、インセスト・タブーでは「異性愛」であることが前提とされていると明言された。そして、強制異性愛、男による女の交換という理論をさらに深め、男同士の関係構造を分析していったのがセジウィックである。

セジウィックは、女性の交換を推進する原動力には男性のホモフォビア（同性愛嫌悪）[※1]が存在すると喝破した。ホモソーシャルリティは、ミソジニー（女性蔑視・女性嫌悪）に基づくことから潜在的にホモエロティック（同性愛的）である。そのため、男性はこのホモエロティックな要素を隠蔽するために、女性を交換するのだとセジウィックは主張する。

またセジウィックの扱うテキストの大半が 19 世紀の作品であることから、セジウィックの関心がホモソーシャル体制、性差別、異性愛主義が三位一体となって現れる、近代核家族を形成する結婚制度にあることがわかる。このように、近代核家族とホモソーシャル体制との共犯関係を暴き出したという点で、セジウィックの功績は非常に大きいと言える[※2]。

2) ジェンダーの非対称性と性愛の三角形

第1章「ジェンダーの非対称性と性愛の三角形」において、セジウィックは、「三角形」という構造から異性愛的欲望を捉え、その上で男性のホモソーシャルな欲望に焦点を当てている。ここでは、ジラール、フロイト理論、ルービンによるレヴィ=ストロース解釈などを中心軸に「男同士の女の交換」という本書の基本パラダイムが論じられている。

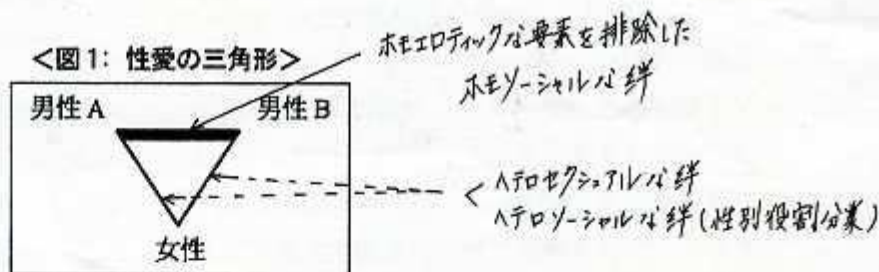
セジウィックは、近代西欧社会以降における性愛関係を論じる場合、一人の女性をめぐる二人の男性の競争関係という「性愛の三角形」を利用すればよいと述べる。「性愛の三角形」において、女性は二人の男性によって選択される対象でしかない。よって、男性対女性の関係は、男性対男性の関係の中に取り込まれてしまっていると言える。

けれども、一見女性を排除するのように見える男性のホモソーシャルな関係や同性愛的関係においても、その構造には女性の地位やジェンダー配置に関わる様々な問題が深く刻印されている。そのため、男性のホモソーシャルな欲望と家父長制を維持するための構造との間には、独特の共生関係が存在するのである。

このように「性愛の三角形」をめぐる男女の力関係は決して対称ではなく、そこには非対称性が存在する。ただし、古代ギリシアでは、「男を愛する男」と「男の利益を促進する男」とが同一であり、ホモセクシュアルな絆とホモソーシャルな絆は地続きであったと言われる。そのため、ホモソーシャル体制にとってホモフォビアは必ずしも必要ではない。

従って、近代西欧社会以降のホモソーシャルリティが内包するミソジニーやホモフォビアは、歴史的な権力関係の中で生じた要素であり、普遍的な要素ではない。よって、この「性愛の三角形」は、非歴史のかつプラトニックな普遍的な図形ではなく、むしろ、ジェンダー・言語・階級・権力の非対称性という歴史的な偶然を反映する図式なのである。

(<図1: 性愛の三角形>参照)



2-1) 性愛の三角形

2-1-1) ジラルールの性愛の三角形

セジウィックが性愛関係を論じる際に依拠する「性愛の三角形」は、元々はルネ・ジラールが「欲望の現象学」において図式化したものである。ジラールは主要なヨーロッパ小説の読解を通して、「性愛の三角形」を積極的に構成する二人のライヴァルに注目し、そのライヴァル関係が形成する権力の演算法を明らかにしようとした。

そしてジラールは、「性愛の三角形」では、愛の主体と対象を結びつける絆よりも、ライヴァル同士の絆の方がずっと強固で、行為と選択を決定すると主張した。彼は、ヨーロッパのハイ・カルチャーな男性中心小説における、一人の女性をめぐる二人の男性の競争という伝統から「性愛の三角形」を導き出した。よって、ジラールが暴き出したものは「男同士の絆」という権力の演算法と言える。

だが、ジラール本人はそのことに気付いてない。そのため、彼は「性愛の三角形」はジェンダー間において対称的であると考えているのだ。なぜなら、彼は「いかなる」ライヴァル意識も同一の競争

と同一化の作用により構造化されていると見ているからだ。すなわち、「性愛の三角形」の図式は、主体と対象がいかなるものであろうと当てはまると見なしている。

2-1-2) 米の保守的な精神分析によるフロイト解釈

さらに、ジラルルの「性愛の三角形」は、フロイトの「エディプスの三角形」の図式にも大きく依拠している。ただ、アメリカの保守的な精神分析によってフロイトが解釈されると、三角形を構成する者たちの間に性差による権力差が生じたとしても、三角形の構造は比較的影響を被らないというように、男女にどのような権力がどのように分配されるかといった性差はほとんど無視されてしまう。

このように、ジラルルや米の保守的な精神分析によるフロイト解釈が「ジェンダーの非対称性」を捉え損なっていると言えるのは、ホモソーシャルな絆とホモセクシュアルな絆に見られる男女の非対称性に言及していない点にある。例えば、我々の社会では、女性のホモソーシャルな欲望とホモセクシュアルな欲望は比較的連続体を成しているのに対し、男性の性的絆と非性的絆は完全に断絶している。

こうした点を考慮に入れれば、三角形の構造は自ずとジェンダーの影響を被り、非対称となる。しかし、ジラルルらは、近代西欧社会においてさえも、ホモソーシャル連続体には、たいした意味を持つような切れ目はないと普遍的に捉えてしまっている。では以下に、「性愛の三角形」がジェンダー間で対称的に成立しないことを証明するため、ジェンダーの非対称性に言及した研究を見ていく。

2-2) ジェンダーの非対称性

セジウィックは、ジラルルが対称的に捉えた男女間の権力配分の非対称性を暴くために、ラカンによるフロイト解釈、ディナースタインやチョドロウらによる近年のアメリカのフェミニズム研究、ルービンによるレヴィ=ストロース解釈、イリガライらを取り上げる。それでは以下に、それぞれの主張を列挙し、ジェンダーが如何に対称的でないかを述べる。

2-2-1) ラカンのフロイト解釈

ラカンが、フロイトを解釈する際に、「ファルス」という概念を生み出したことで、解剖学的なペニスと、権力の場であるファルスを分けて考えることが可能になった。これはすなわち、解剖学的なセックスと文化的なジェンダーを区別して考えることが可能となったことを意味し、その結果、「男の権力」への男性の様々な関わり方が探究される可能性が生まれてきたのである。

2-2-2) 近年のアメリカフェミニズム研究

ディナースタインやチョドロウに代表される近年のアメリカのフェミニズム研究だが、ここでは、コッペリア・カーンの言説を取り上げる。彼女は、子どものアイデンティティ形成の仕方が男女で決定的に異なっていると主張する。子どもは、男児であれ、女児であれ女性から生まれ、女性によって養育されるが、男児は反発、女児は同化によってアイデンティティを形成すると言う。

つまり、男児の男性性が異性との関係から生じるのに対し、女児の女性性は同性との関係から育まれる。そして、男児も女児も自我の感覚を女性との共生的結合から獲得するのにに対し、男性は女性に反発して男性性を形成していき、女児は女性と同一化して女性性を形成していくこととなる。こうした点から、カーンは男女の非対称性に迫る研究を行っている。

2-2-3) ルービンのレヴィ=ストロース解釈

ルーピンは、レヴィ＝ストロースやエンゲルスを援用・批判し、家父長制社会における異性愛体制を論じるには、何らかの形で「女性の交換」という観点を取り入れねばならないと主張した。女性の交換とは、男同士の絆を揺るぎないものにするために、女性を交換可能な象徴的な財として使用し、その根源的目的を達成することである。

レヴィ＝ストロースが述べるには、婚姻とは一人の男と一人の女の間で成立するものではなく、その関係は男性が構成する二つの集団の間に成立し、そこで女は婚姻相手ではなく、交換されるモノとして姿を表すのである。そして、ルーピンは、この女性の役割を単なる儀式上の贈与の対象と位置付けるだけでなく、女性交換のメカニズムを分析していった。

2-2-4) イリガライ

イリガライも、レヴィ＝ストロースの「女性の交換論」を援用しつつ、異性愛の絆と男性のホモソーシャルな絆との関係について論じている。彼女によれば、男性同性愛は社会文化的秩序を支配する法であり、異性愛は経済における役割分担に帰着するそうだ。この論理の生産的な点は、異性愛の絆と男性のホモソーシャルな絆との間にはラング対パロールの非対称性があると述べた点にある。

ただし、イリガライの言う男性同性愛とは、決して男性間の実際の性的交渉を指しているわけではなく、もっと包括的な社会的な絆のような意味を持っている。そうしたものが「真の同性愛」と見なされるようになるにつれ、男性同士の性交渉という意味での「同性愛」はタブー視されて然るべきものとなってしまった。彼女の論理が払ったこの代価は決して小さくない。

3) 感想

セジウィック自身が述べる本書の限界は、第一には異性愛の観点からしか女性を分析していないという点、第二に女性のホモソーシャル構造と男性のホモソーシャル構造との関係が論じられていないという点にある。けれども、セジウィックの目的が、女性差別、同性愛差別を生み出すホモソーシャル体制を暴くことにあることを考えれば、この限界点については本書では目を瞑らざるを得ない。

また、現代社会における女性差別の問題は、結局のところ、男女は同じだと言おうが、男女は違うと言おうが、性差が生物学的に決まっていようが、社会的に形成されようが、それらは二次的な問題に過ぎないのではないか。なぜなら、男性優位異性愛主義が社会に蔓延する価値観である限り、女性が男性よりも相対的に不利な立場に置かれることはほぼ間違いないように思われるからだ。

よって、どんな戦略を採るにしろ、フェミニズムにとって、男性を優位、女性を劣位に置き、男性的価値観を押し付ける既存の男性優位異性愛主義社会の転覆は避けて通れないと言える。さらに、ここで異性愛主義という要素を省いてしまうことは決してできない。これまで述べてきた通り、異性愛システムは、男を男の利益を促進する男として主体化し、女を対象に貶めるための装置である。

ヘテロの女は、異性愛システムによって抑圧を受けるのは同性愛者たちであると信じているかもしれないが、異性愛システムによる同性愛者差別は、男性が女性を対象化するための副産物に過ぎないと考えられる。よって、結婚制度に違和感を持つ私にとっては、同性愛者を軽蔑しつつ、結婚制度に乗っかる女性は、異性愛システムの最も愚かな被害者であると映るのだ。

さらに現代社会において、男性の利益を促進しない男性は「非男性」、すなわち去勢された男と見なされ、ミソジニーを被ると言われる。そうした意味において、ホモフォビアはミソジニーに内包されている。よって、現代を生きるゲイは、ホモフォビアを克服するだけでは男性優位異性愛主義社会に

よる抑圧から逃れることはできないと考えられる。

このように、ミソジニーとホモフォビアは、巧妙にお互いに補強し合い、女性と「非男性」を抑圧するのである。

4) 問題提起 (トピック)

こうした上記の個人的感想と、セジウィックがホモソーシャルな社会に対するフェミニズムとアンチ・ホモフォビアの共闘の土台について論じていることを踏まえて、「全ての女とゲイは、男性優位異性愛主義社会に対し、共闘し得るか。」また、「共闘が可能であるとなれば、どのような戦略を採るべきか。」という問題をトピックとして提示したい。

ただし、これらのトピックは抽象的だと感じる。そこで、近年注目されつつある「クィア理論」について考えてみることを提案する。クィア理論は、既存の男性優位異性愛主義社会に違和感を持つ者全てを「クィア」(変態)と見なし、そうした者たちの連帯を可能にすると言われる。その一方で、それぞれのカテゴリーごとの差異をうやむやにしようとも言われる。

こうした「クィア」の可能性と問題点を踏まえた上で、「フェミニズムとアンチ・ホモフォビアの共闘において、「クィア理論」は有効と言えるのであろうか。さらに、主題である「ファミリー・ロマンス」からあまり脱線しないように、「社会的装置としての役割をなくしてしまった場合、結婚制度は、二者関係にとって必要と言えるのであろうか。」という問題を最後に提示しておくこととする。

注

[※1]ホモフォビアとは、ヘテロ男性にとって自分とは全く外部の「おぞましきもの」に対する嫌悪ではないと竹村は言う。それはむしろ、外部の「おぞましきもの」に反応する、自分の内部の「おぞましきもの」に対するフォビアである。そうした意味で、逆説的ではあるが、同性愛に最も強く共鳴する「自称・異性愛者」こそが、同性愛嫌悪を最も強く表明する者であると言える(竹村 2001)。

よって、男性優位異性愛主義社会における利益を享受している者にとって最も恐るべき事態とは、同性愛者が権利擁護を求めて立ち上がることではない。それよりも、異性愛者が自己の内面に存在する同性愛の可能性に気づくことを恐れるのだ。なぜなら、男性異性愛者の連帯によってもたらされる強固な権利/利益のシステムが、内部崩壊してしまう危険性があるからである。

[※2]本書の「あとがき」を参照。

参考文献

一色清編 2002 『ジェンダーがわかる』朝日新聞社

石田仁 2002 「ジェンダーを理解するためのキーワード50」(一色編 2002: 146-152)

上野千鶴子編 2001 『構築主義とは何か』勁草書房

竹村和子 2001 「「資本主義はもはや異性愛主義を必要としていない」のか」(上野編 2001: 213-253)